

⑤ 工芸分離問題

前出「黒田清輝氏の美術教育に関する意見書」には「美術と工芸」とに厳正なる分離をなすべし」という一項がある。本校創設の際にフェノロサや岡倉覚三は、日本では古来美術と工芸は一体のものとして発展してきたのであるから、西欧のように美術と工芸に優劣をつけて区分することはせず、自国のよき伝統を生かして将来も両者を総合的に発展させるべきであるという見解に基づいて絵画、彫刻、図案ないし美術工芸の三科を併置したのであったが、黒田はその考えを誤謬であると断定し、本校は「純正美術」の開発のみに全力を注ぎ、工芸部門は排斥すべきであると主張した。そして、前述のように文部省専門学務局長の上田万年らと工芸分離の準備を始めたが、途中で挫折した。大村西崖はこれに関して次のように述べている。

○美術通信 △△生〔この分大村西崖執筆〕

△文部の専門学務局長の上田萬年は、一時大に美術學校を改良する簡があつたので、疾うから其噂を聞いて居たが、なか頃濱尾新一に喝されたので折角の考案もグツと行詰つて、藥罐の湯出章魚同様、手も足も出ないといふ仕儀になつて仕舞つた

△濱尾は美術學校が初めて立つころ、骨を折つたので所謂創業の功のある男だ、そこで上田の頭を眞正面から挿へたのは、多分斯うなのだらう、折角久保田鼎が盡力して遣つて居るものだから、何も邪間をせずに今少し遣らせて置いたら宜いぢやないか、といふ位のことだと思ふ、早くいへば隠居をした爺さんが若い者の家

政改革に口を出したのと異なるところはない

△併し美術學校は、言ふまでもなく日本唯一の美術養成所で、美術界の後進諸生を扶掖したり、地方の同種類の學校の模範となつたり、なか／＼容易ならぬ重い任務を脊負つて居るのだ、それに美術上の改良は單獨では出来悪い、何うも官立の費舎でなければ遣切れない事情も多いのだから、改良の上にも改良を施して、善美のものにしたいといふ上田等の意見は、實に尤も至極のことだ△然るに今の美術學校の實際を見ると、久保田も追々骨を折つて改良をして居るには相違ないが、第一組織の根本から何うも氣に喰はない、といふのは毎度美術通信の中にも論じたことだが、今の學校は上級の美術と下級の工藝とがごたまぜになつて、雙方とも平等無差別に教へられてをる、是れは理論上許せぬばかりでなく、極めて費用の尠ない學校の力を二分して雙方共倒れの姿になりはせぬか、吾々の望むところをいへば、地方の學校は兎も角もとして東京のだけは、眞の美術養成所として、且つは二分の力を一方に傾けて立派なる如法の美術學校にしたいといふに在るだ△或人は久保田の改良の仕振を見て、久保田よりはまだ岡倉覺三の方が増しだらうと云つたが、そんなことは何うでも宜いとして岡倉は妙に國粹保存といふやうなことが頭腦に染込むでゐた、此れ／＼の藝道がモウ廢れると聞くと、すぐにそれを學校に持込むで課目の中に入れてしまふ、その藝道が眞實美術であらうが、なからうが、そんなことには一向頓着しない、そこで學校は何時の間にが段々とガラクタ屋になつて仕舞う、結局今の美術學校がその名に背いて美術工藝無差別の有様となつたのは、皆岡倉の拵へ

上げた仕事だ、それを久保田が後生大事に守ってチヨイ／＼と姑息の改良をして居るのは、氣毒といへばマアソナものだ

△併し國粹保存といふやうなことは、得て俗に入り易いものだから、岡倉の方からいへば是れが一時美術界に幅を利かせた大原因となつたかも知れぬ、岡倉はマア彼れで宜いとして其後を繼ぐものは、何とか一工夫しなければ成らぬ筈だ

(明治三十二年八月七日『時事新報』)

「浜尾新一喝」云々の真偽は定めがたいが、本校に隠然たる力を及ぼしていた浜尾であつてみれば、そうしたこともあつたかも知れず、それが改革に歯止めをかけたであらうことは十分考えられる。ただし、大正五年に国民美術協会が提出した本校改革案(岩村透、黒田清輝らの主張を代弁していると考えられる。)にこの工芸分離問題が盛り込まれているところを見ると、黒田はこの考えをのちのちまで持ち続けていたようである。

⑥ 生徒成績品展覧會

恒例の生徒成績品展覧會が明治三十二年四月十三日から四月十九日まで本校新館において開催され、各科生徒の作品と参考作品(教官の作品と明治二十九年以降の卒業制作中の優等のもの)が展示された。総入場者数は一万二二三〇人であつた。四月十三日の賞状授与式の模様と受賞者を『校友会雑誌』第一号(同年十一月発行)は次のように伝えている。

生徒成績品展覧會賞状授與式景況

明治三十二年四月十三日午前八時職員生徒式場に整列し一統敬禮の後久保田校長心得は日本繪畫科生徒始め各科優等者に賞状を授與せられ左の式辭を朗讀せらる

式辭

生徒諸子が切磋勲勉ノ成績品ヲ陳列シテ諸子が常ニ愛養ト監督トヲ受クル所ノ父兄保證人及ビ他日諸子が社會ニ出デ、共ニ藝苑ニ馳驅スル所ノ斯道ノ有志諸人ニ示スコトハ諸子が修養ノ實際ヲ知ラシメ諸子が藝術ノ信用ヲ得ルニ於テ最モ効果アル所ノ方法トス 余ハ諸子ノ爲メニ此公會ヲ開クヲ喜ブト共ニ職員諸君及ビ生徒諸子が此好成绩ヲ出シ且會事ニ盡力シタル勞ヲ謝ス

茲ニ獎勵ノ主意ニ基キ各出品ニ就テ審査ヲ行ヒ慎重ナル詮衡會議ヲ經テ優劣ヲ評定シ今日開會ノ初ニ當リテ賞状ヲ授ケ以テ技術ノ優等ヲ表ス 授賞者諸子之ニ安ゼスシテ益々奮勵アランコトヲ望ム

明治三十二年四月十三日

東京美術學校長心得 久保田 鼎

右朗讀するや受賞者總代河邊正夫氏左の答辭を讀む

答辭

本校生徒成績品展覧會開會セラレ茲ニ賞状授與ノ典ヲ擧ゲラレ生等拙劣ノ技ヲ以テシテ賞撰ニ與ルコトヲ得タリ 何ノ光榮カコレニ如カン 請フ益研鑽ノ功ヲ積ミ以テ此名譽ニ乖カザラントス

明治三十二年四月十三日